

〔 学術論文 〕

セクシュアル・ハラスメントの構造的要因

- 大学教職員調査データの二次分析より -

Some Structural Factors of Sexual Harassment:
A Secondary Analysis of A University Staff Survey

石 川 洋 明¹

要約：

本稿では、大学における教職員向SH調査のデータを用いつつ、セクシュアル・ハラスメント（以下SHと略記）定義とその規定因、また、部局ごとのSH生起率の差と、それを規定する要因についての分析を試みた。

SH定義では3因子が析出されたが、その分布については、性別、年代以外に、SHに関連する意識が規定することがわかった。部局については、最終的には規定因から外れた。

生起率部局差の規定因については、データの限界により、SH定義と生起率との関連について特定できるモデルが成立せず、十分な結論を得るまでには至らなかった。だが、データの限界の裏側にある「声なき声」の存在について認識する機会が得られたことは、防止という面では有意義なことであった。

なお、SH定義とSH生起の関連性をめぐって、SH定義の厳しさはホンネかタテマエか、ということについても若干の考察を試みた。今回のデータでは、定義と生起率についてのサブカテゴリーが部局という比較的大きな範囲であることもあり、より詳細な所属を勘案しなければ環境因としてのSH定義の影響の大きさを特定することは難しいであろうことが指摘された。

キーワード：セクシュアル・ハラスメント、定義、防止

1. 問題の所在

1.1. SH研究の意義

SHは、職場等の権力を濫用して、相対的に弱い立場の者に性的な要求をおこなったり、性的に不快な環境をつくったりする行為として定義される（養父・牟田，1999:2）。これは、被害者の人権を蹂躪し、生活を破壊する大問題である。だがSH概念に対しては、提唱当初より受容に

関する「温度差」が存在し、適切な知識の獲得や防止対策の整備などが妨げられていると思われる。このような状況に対応し、より効果的なSHの防止をおこなうためにも、SHの生起状況などについての実証的な分析が重要と思われる。

本稿では、上記の課題に応えるため、大学における調査データを分析し、メンバーのSH他に関する意識、およびSHの生起状況との関連をさぐり、SHの生起に寄与する要因を探索し、防止の方策について考察することを目的とする。

1.2. 方法

本稿での分析に使用するデータは、2002年度に中部地方の公立大学であるN大学で実施した教職員向けのSH調査のものである。筆者はこの調査に、設計および分析をおこなう専門委員会の委員として参加し、データの二次使用について、匿名性の保持を条件に許可を得た。ただし、調査が無記名の質問紙調査であったため、データの匿名性は最初からある程度確保されている。

調査は2002年10～11月、自記式11ページの質問紙を用い、配付回収法によっておこなわれた。質問紙は、SHに関する知識および情報源（問1）、SHや性別役割などに関する意識（問2）、SH定義に関する判断（問3）、SH被害経験概況（問4）、最も苦痛だった被害経験（3件まで）（問5）、SH防止に関する意見（問6）、およびフェイス項目（問7）によって構成した。質問紙は各部局を通じて配付され、封筒に密封の後、各部局備え付けのポストおよび郵送によって回収した。

回収数は829票であったが、回収率は不詳である。ただし、2009年4月現在での全学部・病院・事務職員を含めた職員定数は約1500人²、2012年5月1日現在では1657人³であり、2002年以降、人員の大幅な増減をもたらすような組織形態の変更はなかったため、当時の定数からしても回収率は比較的高かったものと推測できる。

1.3. 課題の設定

この調査に関する単純集計を中心とした報告書は、筆者も執筆に参加し、既に完成し発表されている（セクシュアル・ハラスメント専門委員会 2002a, 2002b）。報告書は、調査項目（上記問1～7）に添いながら、単純集計をもとにまとめられている。この結果をここで簡潔にまとめるのは紙幅の関係で困難なので、結果は以下の行論の中で適宜紹介しつつ、本稿では、特に重要な問題として、以下の2点の分析を試みたい。

まず、SH定義に寄与する要因について検討したい。単純集計・クロス集計の結果、中年男性のSH定義が他のカテゴリーより厳しいものであることが明らかになった。このSH定義への寄与要因について、まず検討してみたい。また、この厳しさが意識の高さを意味するか、すなわち、定義の厳しさはホンネかタテマエか、ということについても若干の考察を試みてみたい。

次に、単純集計・クロス集計では、部局ごとの生起率に差があった。この差に寄与する要因は何か、部局環境（意識、集団文化）は発生率に影響するかについて、できる限りの考察を試みたい。確かに、SHは加害者が被害者に加害行為をすることによって発生するものである。だが、被害者が属する集団・組織などによっては、被害者が被害を訴えにくい状況が発生することがあり、それが加害者の加害への抑止力を弱めて発生の誘因となることや、被害が表面化するのを遅らせて被害を遷延・重篤化させる要因となることは十分考えられる。したがって、集団・組織の環境が発生率に影響するという推論は理論的にも可能である。

なお、このような課題の設定は、テーマに関連する文献渉猟を経てリサーチクエスションとして定式化され、それにとまって調査が設計されることが通常である。しかし今回、筆者が委員会の委員として調査設計にかかわったこともあり、この部分については簡潔な経緯の報告のみにとどめたい。

まず第1の課題だが、教職員等がSHに対してどのような見方をしているのか、というのが調査時の目的であった。したがって、定義が3因子構造になっており、しかも分布のしかたが各因子でちがっている、というのは事後的な発見である。これを考察するのは、どのような要因でSHについての見方が形成されるか、ということ考察することに意義があると考えからであるが、それに加え、第2の課題の予備的な考察の意味もある。

第2の課題は、なぜSHの生起が部局によって異なるのか、ということ考察することで、その条件を明らかにすることが予防的な意義ももつのではないかと考えたからである。このように、環境因が被害/加害経験の何らかの関連要因になるだろう、という発想は、SHよりはじめなどの問題の発想に近い。たとえば森田ははじめの生起と周囲の傍観者層との関連を実証研究によって明らかにし、そのメカニズムをさぐっている（森田, 2010）。この考え方がSHにも応用できないか、というのが第2の課題の初発の問題意識であった。

2. 定義の構造

2.1. 定義の構造

メンバーによるSHの定義については、問3に15項目の質問を用意し、「セクハラになる」「繰り返し行われればセクハラになる」「セクハラにはならない」の3択で定義に関する判断を訪ねた。その結果を15項目それぞれについて見るのは煩雑であるため、因子分析によって定義の構造の把握を試みた。因子分析の結果は表2-1のようであったので、項目の内容を勘案して表2-2のように因子を命名した。

また、それぞれの因子を構成する項目について信頼性分析をおこなったところ、クロンバックの係数がそれぞれ .837、.738、.755となったため、各項目を加算して一元化した後、判断が厳しいほど高得点になるように調整して得点化した。その結果、図2-1が得られた。

表2-1 因子分析結果（主因子法・バリマックス回転）

項目	内容	因子1	因子2	因子3
項目3-1-11	お酌強要	.734	.350	.098
項目3-1-10	デュエット強制	.700	.322	.087
項目3-1-9	お茶汲み・片づけ	.689	.012	.152
項目3-1-16	「女は楽でいいな」	.593	.184	.236
項目3-1-12	しつこいデート誘い	.461	.413	.258
項目3-1-1	容姿・服装他批評	.454	.150	.298
項目3-1-8	胸・尻への視線	.359	.317	.243
項目3-1-15	髪・肩接触	.299	.627	.102
項目3-1-13	酒席で接触して座る	.147	.562	.268
項目3-1-2	酔って抱きつく	.323	.496	.277
項目3-1-17	裸で歩き回られる	.245	.469	.117
項目3-1-14	手を握ろうとする	-.102	.430	.346
項目3-1-7	性関係迫る	.378	.395	.259
項目3-1-5	私生活詮索	.123	.407	.623
項目3-1-4	性的噂	.390	.195	.569
項目3-1-3	猥談聞かせる	.346	.144	.560
項目3-1-6	性体験詮索	.208	.422	.456

表2-2 因子の命名

因子	項目	命名	内容
第1因子	3-1-11, 3-1-10, 3-1-9, 3-1-16, 3-1-12, 3-1-1, 3-1-8	性役割・アピール因子	「女らしい」役割行動の強要や容姿批評など、性役割に関するSHに対する判断を示す因子
第2因子	3-1-7, 3-1-2, 3-1-15, 3-1-17, 3-1-13, 3-1-14	性的接触因子	身体接触や性関係強要など、身体的接触をともなうSHに対する判断を示す因子
第3因子	3-1-4, 3-1-3, 3-1-6, 3-1-5	性的言辞因子	私生活・性体験の詮索や性的噂の流布など、ことばによるSHに対する判断を示す因子

図2-1 定義得点分布

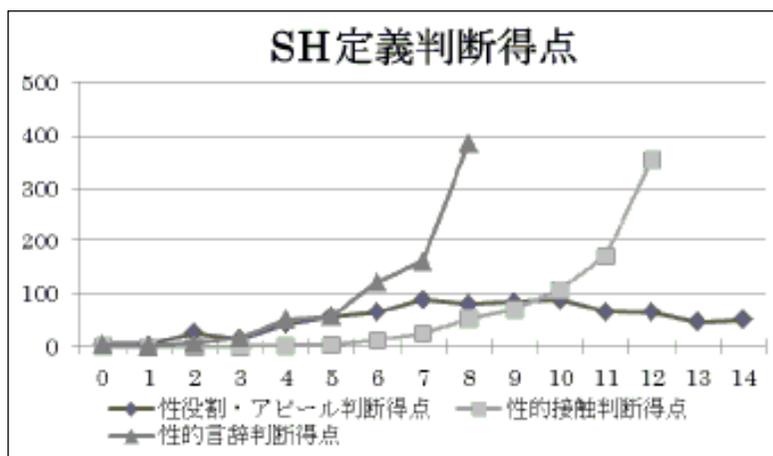


図2-1に見られるように、性役割・アピールに関する得点分布はゆるやかだが中央が高い形をとり、判断のばらつきがわかる。一方、性的接触に関する得点分布は、最高点である12点が最頻値であり、急峻な右肩上がりの形で、多くの人が一致して厳しい判断を下していることが見てとれる。性的言辞に関する得点分布も最高点（8点）が最頻値で、グラフの形状も性的接触のものに似ている。

この得点のカテゴリーごとの平均値を算出し、一元配置分散分析をおこなったところ、表2-3のような有意差が見られた。

表2-3 定義得点平均値のカテゴリーによる差

カテゴリー	第1因子（性役割・アピール）		第2因子（性的接触）		第3因子（性的言辞）	
性別	ns		**	男 > 女	ns	
年代	+	40 > 50 > 30 > 60 > 20	*	50 > 40 > 60 > 30 > 20	***	50 > 40 > 60 > 30 > 20
身分	**	非教 > 常教 > 常職 > 非職	*	常教 > 非教 > 常職 > 非職	*	常教 > 非教 > 常職 > 非職
所属部局	**	医・病院低	***	医・病院低	**	理系学部・病院低
補職	ns		ns		ns	
指導命令	*	立場上 > しない > 實際上	ns		**	立場上 > 實際上 > しない
知識	***	多 > 中 > 少	**	多 > 中 > 少	*	多 > 中 > 少
重症度段階	ns		ns		ns	

凡例：***=0.1%水準で有意差、**=1%水準で有意差、*=5%水準で有意差、+=10%水準の有意差傾向、ns=有意差なし

この結果で興味深いのは、2つの傾向が混在していることである。1つは所属部局、知識などで見られるもので、それぞれ文化系、知識のある者がSHの判断基準が厳しい。もう1つは性別、年齢などで見られるもので、女性より男性、若年よりも壮年・熟年の判断基準が厳しい。前者は一般的に知られている傾向と同様であり、予想の範囲内であったが、後者は予想外の傾向であった。この事態をどのように解釈すべきかを探るため、重回帰分析により、さまざまな要素の寄与のしかたを見た。

2.2. 定義に寄与する要因

ところで、SHの定義判断に寄与する要素としては、性別、年齢、所属部局などの属性のほか、SHに関する知識、ハラスメントやジェンダーに関する意識が考えられる。よって、重回帰の際には、以下のように各変数を投入し、いくつかのモデルを作成して検討した。なお、結果解釈の便宜のため、前述のように、従属変数は高得点ほどSH定義が厳しくなるように調整したほか、項目1-1（知識）は高得点ほど知識が多く、項目4 経験得点は高得点ほど被害経験が多く、項目2の各項目は高得点ほど平等・リベラル志向になるように、各項目をそろえて調整した。また、属性についてはダミー変数を使用した。なお、2の各項目の質問内容は表2-4を参照されたい。

セクシュアル・ハラスメントの構造的要因 (石川)

表2-4 質問2の各項目の内容

2 - 1	SH解決を外部にまかせるな	2 - 8	SHは「やめてほしい」と言えば止まる
2 - 2	女は結婚したら夫・子ども優先	2 - 9	自分の所属集団内に権力的嫌がらせはない
2 - 3	目上の意向には従うもの	2 - 10	SH概念一人歩きで加害者扱いされる
2 - 4	SH問題は過剰に取り上げられている	2 - 11	明確な同意なしに性的行動は許されぬ
2 - 5	SH被害者には通常落ち度はない	2 - 12	SHする人には人間的な問題あり
2 - 6	集団内の和のため個人の欲求は抑えよ	2 - 13	性的関心表明は性的魅力評価
2 - 7	「男は仕事、女は育児」は偏った考え方	2 - 14	何かの折に自分もSHしてしまっているかも

まず、性役割・アピールに関わるSH定義への寄与要因を見てみよう。

表2-5 回帰分析結果 (従属変数 = 性役割・アピール得点)

項目	1 β ¹ →	2 β ² →	3 β ³ →	4 β ⁴ →	5 β ⁵ →	6 β ⁶ →	7 β ⁷ →
(定数)	***	***	+				
項目1-1 リバース	0.194 ***	0.191 ***	0.113 **	0.097 *	0.092 *	0.094 *	0.092 *
項目4 経験得点		0.067 +	0.027	0.061	0.063	0.068 +	0.065
項目2-1			0.036	0.035	0.040	0.037	0.039
項目2-2			0.085 *	0.083 +	0.082 +	0.080 +	0.081 +
項目2-3			0.062	0.054	0.052	0.055	0.054
項目2-4			0.112 *	0.124 **	0.124 **	0.119 *	0.120 **
項目2-5 リバース			0.170 ***	0.154 ***	0.154 ***	0.145 ***	0.144 ***
項目2-6			-0.047	-0.043	-0.043	-0.046	-0.047
項目2-7 リバース			-0.015	0.006	0.004	0.006	0.006
項目2-8			0.081 *	0.091 *	0.093 *	0.092 *	0.092 *
項目2-9			0.056	0.046	0.038	0.035	0.034
項目2-10			0.098 *	0.114 **	0.111 *	0.119 **	0.118 **
項目2-11 リバース			0.046	0.033	0.031	0.029	0.028
項目2-12			-0.089 *	-0.090 *	-0.092 *	-0.094 *	-0.096 *
項目2-13			0.060	0.078 +	0.074 +	0.071 +	0.071 +
項目2-14 リバース			0.150 ***	0.125 **	0.123 **	0.130 **	0.129 **
項目7-1: 男性ゲーム				0.103 *	0.086 +	0.078	0.079
項目7-2: 年齢5段階				0.035	0.034	0.008	0.005
項目7-3: 教員ゲーム					0.049	0.019	0.012
項目7-3: 常勤ゲーム					0.039	0.057	0.053
項目7-4: 医学部ゲーム						-0.008	-0.011
項目7-4: 薬学部ゲーム						0.041	0.040
項目7-4: 経済学部ゲーム						0.048	0.047
項目7-4: 人文社会学部ゲーム						0.061	0.061
項目7-4: 芸術工学部ゲーム						0.027	0.026
項目7-4: 看護学部ゲーム						0.000	-0.001
項目7-4: 自然センターゲーム						0.039	0.038
項目7-4: 事務局ゲーム						0.029	0.029
項目7-4: 病院ゲーム						-0.040	-0.043
項目7-6: 推薦割合リバース							0.026
調整済み R2 値	0.036	0.039	0.185	0.193	0.194	0.193	0.192

性役割・アピールに関する定義について、ステップワイズ法によって順次変数を投入していき、上記表2-5のような7つのモデルを得た。表に見られるように、変数を増やしていても有意傾向(危険率 $p < .10$)のある独立変数はほぼ共通しており、この定義に寄与する変数が一定のものであることがわかる。

すなわち、項目2-5、2-14、2-4、2-10、2-8、2-12、知識の7項目が5%水準で有意に寄与し、

男性ダミー、2-2、2-13の3項目の寄与に有意傾向がある。つまり、SHについて「被害者に落度あり」と思い、「自分も何かの折にしている」とは思わず、「過剰に取り上げられている」「概念が一人歩き」「止めてといえばおさまる」「おこすのは問題のある人」と考え、知識が少ない者が甘いSH定義をもつこと、そして「女性は結婚後夫子どもを優先」「性的関心は性的魅力評価」と思う者が甘いSH定義をもつ傾向があることが明らかになった。

なお、性別や経験による寄与はモデルの複雑化に伴って消えたので、最終的にこの定義に寄与するのは、上記9項目のような知識と態度であるということができるだろう。

次いで、性的接触に関連するSH定義への寄与要因を見てみよう。

表2-6 回帰分析結果（従属変数 = 性的接触得点）

項目	1 β ¹	2 β ²	3 β ³	4 β ⁴	5 β ⁵	6 β ⁶	7 β ⁷
(定数)	***	***	***	***	***	***	***
項目 1-1 リバース	0.134 **	0.134 **	0.096 *	0.058	0.054	0.052	0.051
項目 4 経験得点		0.010	-0.016	0.041	0.040	0.045	0.043
項目 2-1			0.040	0.039	0.043	0.038	0.039
項目 2-2			0.089 *	0.085 +	0.084 +	0.089 *	0.089 *
項目 2-3			0.039	0.022	0.020	0.029	0.028
項目 2-4			0.065	0.084 +	0.085 +	0.071	0.071
項目 2-5 リバース			0.040	0.015	0.014	0.007	0.007
項目 2-6			-0.036	-0.029	-0.029	-0.043	-0.043
項目 2-7 リバース			-0.013	0.023	0.022	0.020	0.020
項目 2-8			0.032	0.051	0.052	0.051	0.051
項目 2-9			0.032	0.015	0.009	0.002	0.001
項目 2-10			0.037	0.063	0.062	0.077 +	0.077 +
項目 2-11 リバース			0.094 *	0.070 +	0.070 +	0.074 +	0.073 +
項目 2-12			-0.128 **	-0.128 **	-0.128 **	-0.123 **	-0.124 **
項目 2-13			0.080 +	0.108 *	0.104 *	0.093 +	0.092 *
項目 2-14 リバース			0.119 **	0.079 *	0.077 +	0.075 +	0.075 +
項目 7-1: 男性ダミー				0.160 **	0.150 **	0.108 *	0.108 *
項目 7-2: 年齢 5段階				0.079 +	0.082 +	0.051	0.049
項目 7-3: 教員ダミー					0.023	-0.030	-0.035
項目 7-3: 常勤ダミー					0.044	0.095 *	0.092 *
項目 7-4: 医学部ダミー						0.059	0.058
項目 7-4: 薬学部ダミー						0.033	0.031
項目 7-4: 経済学部ダミー						0.050	0.049
項目 7-4: 人文社会学部ダミー						0.050	0.050
項目 7-4: 芸術工学部ダミー						-0.002	-0.002
項目 7-4: 看護学部ダミー						-0.009	-0.010
項目 7-4: 自然センターダミー						-0.003	-0.004
項目 7-4: 事務局ダミー						0.081	0.081
項目 7-4: 病院ダミー						-0.099	-0.101
項目 7-6: 指導命令リバース							0.017
調整済み R2乗	0.016	0.015	0.083	0.111	0.111	0.121	0.120

性的接触に関する定義についても、ステップワイズ法によって順次変数を投入していき、上記表2-6のような7つのモデルを得た。ここでもやはり、変数を増やしていても有意傾向（危険率 $p < .10$ ）のある独立変数はほぼ共通しており、この定義に寄与する変数が一定のものであることがわかる。

有意に寄与しているのは、項目2-12、性別、常勤ダミー、2-13、2-2で、有意傾向があったの

セクシュアル・ハラスメントの構造的要因 (石川)

は項目2-10、2-11、2-14である。すなわち、「SHをおこすのは問題のある人」「性的関心は性的魅力評価」「女性は結婚後子どもを優先」と考える人は接触に関連するSHの定義が甘く、「SH概念が一人歩き」と考え、「性的行動には明確な同意必要」「自分も何かの折にしている」とは思わない者は定義が甘い傾向がある。また、男性より女性、常勤より非常勤のほうがSH定義は甘い。

男性の方が接触に関する定義が厳しいのは、SH概念が人口に膾炙し、男性の性的接触に関する態度が変容したことの表れと考えられる。しかし一方で、性的な問題に関する同意等をルーズに考えつつ、性的な問題の発生は一部の人の問題である、とするような態度がSH定義の甘さに寄与していることも確かである。男性は、平均的にはSHについて厳しい考えをもつようになったかもしれないが、性的な事柄について自己中心的な態度が残存していれば、それはSH定義の甘さにつながるだろう。

最後に、性的言辞に関わるSH定義への寄与要因を見てみよう。

表2-7 回帰分析結果 (従属変数 = 性的言辞得点)

行	1	2	3	4	5	6	7
(定数)	△	△	△	△	△	△	△
項目1-1 リバース	0.178 ***	0.176 ***	0.123 **	0.094 *	0.092 *	0.092 *	0.088 *
項目4 経験得点		0.045	0.019	0.061	0.059	0.062	0.056
項目2-1			-0.012	-0.012	-0.010	-0.010	-0.005
項目2-2			0.047	0.041	0.040	0.041	0.042
項目2-3			0.023	-0.003	-0.005	0.000	-0.002
項目2-4			0.125 **	0.142 **	0.144 **	0.134 **	0.136 **
項目2-5 リバース			0.105 **	0.076 +	0.075 +	0.070 +	0.068 +
項目2-6			-0.063	-0.060	-0.061	-0.065	-0.066
項目2-7 リバース			-0.042	-0.014	-0.015	-0.015	-0.014
項目2-8			0.076 +	0.095 *	0.096 *	0.095 *	0.096 *
項目2-9			0.052	0.036	0.034	0.031	0.029
項目2-10			0.032	0.050	0.051	0.061	0.061
項目2-11 リバース			0.063	0.033	0.034	0.034	0.032
項目2-12			-0.068 +	-0.065 +	-0.064 +	-0.060	-0.064
項目2-13			0.042	0.054	0.050	0.046	0.045
項目2-14 リバース			0.082 *	0.054	0.053	0.055	0.053
項目7-1: 性別				-0.053	-0.052	-0.018	-0.019
項目7-2: 年齢5段階				0.162 ***	0.167 ***	0.148 **	0.141 **
項目7-3: 教員ゲーム					-0.002	-0.038	-0.055
項目7-3: 常勤ゲーム					0.033	0.065	0.056
項目7-4: 医学部ゲーム						0.076	0.070
項目7-4: 薬学部ゲーム						0.040	0.036
項目7-4: 経済学部ゲーム						0.059	0.059
項目7-4: 人文社会学部ゲーム						0.047	0.047
項目7-4: 芸術工学部ゲーム						0.028	0.027
項目7-4: 看護学部ゲーム						-0.006	-0.008
項目7-4: 自然センターゲーム						0.033	0.030
項目7-4: 事務局ゲーム						0.051	0.050
項目7-4: 病院ゲーム						-0.020	-0.027
項目7-6: 指導命令リバース							0.060
調整済み R2 乗	0.030	0.031	0.090	0.117	0.115	0.113	0.114

性的言辞に関する定義についても、ステップワイズ法によって順次変数を投入していき、上記表2-7のような7つのモデルを得た。やはり、変数を増やしていても有意傾向 (危険率 $p < .10$)

のある独立変数はほぼ共通しており、この定義に寄与する変数が一定のものであることがわかる。7つのモデルのうちではモデル4が最も当てはまりがよいが、モデル5～7もほぼ同じくらいの調整済みR²乗値をとっており、この4つのモデルでほぼ共通して有意な寄与が見られたのは、知識、項目2-4、2-8、年齢で、有意傾向があったのは項目2-5、2-12である。

すなわち、年齢が低い方がSH定義は甘く、SHについて「過剰に取り上げられている」「止めてといえおさまる」と考える者の方がSH定義は甘く、「被害者に落度」「概念が一人歩き」とは思う者は定義が甘い傾向がある。

以上3つの定義について、主な寄与要因を整理してみると、下の表2-8のようになる。

表2-8 SH定義に寄与する変数

従属変数	有意に寄与する変数
性役割・アピール得点	2-5、2-4、2-14、2-10、2-8、2-12、1 (男性ダミー、2-2、2-13)
性的接触得点	2-12、男性ダミー、常勤ダミー、2-13、2-2 (2-10、2-14、2-11)
性的言辞得点	年齢、2-4、2-8、1 (2-5、2-12)

ベータ(標準化偏回帰係数)の絶対値の大きい順、カッコ内は有意傾向(p<.10)

ここからも明らかなように、定義に寄与する要因はおおむね共通している。すなわち、全項目有意な寄与またはその傾向を示した項目2-12、2-14、2-10、2項目有意に寄与した知識、項目2-4、2-8、2項目以上有意な寄与またはその傾向を示した項目2-2、2-5、2-10、2-13、性別などが寄与要因として注目すべきものといえる。

先にカテゴリーごとの定義に関する差の分析において、2傾向が混在すると筆者は述べた。しかし、差の表われた属性のうち、性別、年齢については得点に対する有意な寄与がいくつか見つかっているが、所属部局についてはどのダミー変数も有意な寄与を示さなかった。したがって、部局による定義判断傾向の差は、所属する成員の知識や意識の差に還元されると考えられる。

性別については、性的接触得点において男性であることが判断の厳しさに寄与しており、男性が性的接触にかかわるSHについて慎重であることがわかる。年齢については、性的言辞得点において、年齢の高さが判断のきびしさに寄与しており、年齢が高い方が性的言辞にかかわるSHについて慎重であることがわかる。この2傾向が相まって、中年男性のSH定義の厳しさというものが結果として表れたのだと推測できる。

3. 被害の部局差

上記4.で、SH判断基準に部局が直接寄与するのではない、と確認はされたが、一方で部局ごとの被害申告の差は厳然として存在する。ただ、被害については、問4で被害全般について、問5で3つの被害に関する詳細について、それぞれ聞いたため、各回答者の被害の全体像をつかむた

めには多少の工夫が必要となる。そこで、各回答者の被害状況全体をとらえるために、被害重症度に関する指標「重症度得点」および「重症度段階」を作成した⁵。

3.1. 重症度

質問紙では、回答者のSH被害等の経験を聞く問4で、SHの内容を13のカテゴリーに分け、それぞれについて、経験なし、1～2回、3回以上の3択で回答していただいた。その回答に対し、経験なしに0点、1～2回に1点、3回以上に2点の得点を与えた後、13カテゴリーのうち「対価型」項目の得点を5倍、「身体への暴力的接触」項目の得点を3倍、「交際の強要」「性的アピールの強要」の2項目の得点を2倍し、それにその他8項目の得点を加算して「重症度得点」を算出した。これは、表3-1のような考え方にしたかったものである。

この結果、「重症度得点」は最高34点、最低0点の範囲を取ったが、これを、上記の考え方を援用し、0点、1点、2点、3～4点、5～9点、10点以上の6段階に分け、それぞれ「なし」「危惧」「軽度」「中度」「重度」「最重度」と名づけた。その結果は表3-2の通りである。

表3-1 重症度得点・重症度段階の算出方法とその考え方

重症度得点算出方法	重症度得点 = (4-1-a)*5+(4-2-a)*2+(4-3-a)*2+(4-4-a)*3+(4-5-a)+(4-6-a)+(4-7-a)+(4-8-a)+(4-9-a)+(4-10-a)+(4-11-a)+(4-12-a)+(4-13-a)
重症度段階	重症度得点0 = 「なし」、1 = 「危惧」、2 = 「軽度」、3～4 = 「中度」、5～9 = 「重度」、10以上 = 「最重度」
考え方	対価型は1度でも重度とし、1回につき5点とする。身体への暴力的接触は1度で中度、2度以上重度とし、1回につき3点とする。交際強要、性的アピール強要は1度で軽度、2度以上で中度と考え、1回につき2点とする。環境型は1度で危惧、2度以上で軽度。いくつか重なって起きた場合には足し算する。たとえば環境型2項目にわたって2度以上なら中度、3項目以上にわたって2度以上なら重度、など。

表3-2 重症度段階分布

	なし	危惧	軽度	中度	重度	最重度	計	欠損値	合計
度数	460	41	76	67	93	62	799	30	829
有効%	57.6	5.1	9.5	8.4	11.6	7.8	100.0		

3.2. 被害経験の部局差

さて、以上の準備をした上で、部局ごとの被害経験の平均を計算し、その差を見てみよう。結果として、表3-3が得られた。

表3-3 部局別被害経験

	問4 経験数 計	問4 経験重 症度得点	問4 経験重 症度段階	問4性役割・ アピール被害 経験	問4 性的接 触被害経験	問4 性的言 辞被害経験	問4 目撃 計	問4 相談 計	問4 見聞 計	問5 経験数	問5 経験 得点
医	1.57	1.73	1.09	.94	.40	.52	2.09	.58	2.40	.20	.24
薬	.52	.52	.52	.19	.14	.14	1.05	.57	2.00	.09	.09
経	1.85	1.95	.85	1.10	.45	.60	2.40	1.30	3.50	.25	.30
人 社	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00
芸 工	.90	1.10	.67	.67	.29	.19	1.24	.38	.95	.09	.09
看 護	1.58	2.03	.94	.91	.48	.33	1.12	.73	1.97	.21	.18
自 然	.46	.54	.42	.33	.08	.13	1.18	.45	1.55	.08	.12
事務局	.64	.68	.61	.46	.11	.21	.44	.12	.56	.07	.04
病 院	2.61	3.22	1.68	1.36	.99	.71	2.53	1.25	3.43	.32	.43
その他	.96	1.07	.85	.74	.15	.30	.92	.04	1.04	.36	.43
不明	3.01	3.75	1.84	1.61	1.24	.75	3.34	1.51	3.95	.21	.27
合 計	2.06	2.48	1.35	1.13	.72	.57	2.20	.96	2.85	.25	.32
F 値	4.103	4.136	5.082	2.677	5.963	2.341	2.794	1.769	3.168	1.833	1.844
有意確率	.000	.000	.000	.003	.000	.010	.002	.062	.001	.051	.050

重症度段階で見ると、病院、医学部、看護学部が高得点で、経済学部が続く。問4の13項目を定義の検討の際に抽出した3因子と照らし合わせて「問4性役割・アピール被害経験」「問4性的接触被害経験」「問4性的言辞被害経験」の3つに分類し、それぞれの経験数類型を見ると、性役割・アピール被害が高得点なのは病院と経済学部、性的接触被害が高得点なのは病院で、以下看護、経済、医と続き、性的言辞被害が高得点なのは病院、経済、医である。

しかし、表3-3をご覧いただければわかることだが、実は、部局をたずねた項目に記入がなく所属部局の特定できない「不明」カテゴリーの被害経験のスコアが、非常に高い。経験数類型、重症度得点、重症度段階すべてについて、どの部局よりも高い。これは、SH被害を経験された方が、報復等を怖れて部局は明らかにしないまま、それでも被害の現状だけは伝えたい、という思いで調査に回答されたものではないか、と推測できる。いわば「声なき声」であり、SH防止を志すものにとってはたいへん重要なデータといえる。

3.3. 部局差寄与要因検討の困難

しかし、この「声なき声」の存在感があまりに大きいため、逆に、部局差への寄与要因を検討するのに困難が生じた。

当初の意図では、各回答者の被害経験を従属変数にし、環境要因として意識や定義に関連する得点の部局別平均を説明変数とするマルチレベル分析によって、部局差がある程度説明できると考えていた。しかし、「不明」カテゴリーにおいては、意識や定義に関連する得点の平均値を算出することは意味がない。このカテゴリーの方々は、同じ部局に属しているという保障はないのだから。

そこで、「不明」カテゴリーを除いてマルチレベル分析をおこなってみたが、意識や定義に関連する得点の部局別平均を説明変数とするよいモデルをつくることができなかった。試行錯誤の一例として表3-4を掲載するが、分布が広く散らばり差が出やすいと思われる性役割・アピール被害経験を従属変数とし、説明変数に項目7-1(性別) 項目2-5(被害者責任に関する意見)の部局別平均値、項目3-1(性役割・アピール被害定義)の部局別平均値を投入した場合でも、有意な説明変数とされるのは性別のみであり、部局別平均値は有意な説明変数とはならない。

表3-4 マルチレベルモデル

	推定値	標準誤差	自由度	t	有意	95% 信頼区間	
						下限	上限
切片	-.051323	2.464099	1493.730	-.021	.983	-4.884786	4.782139
N7.1	1.078028	.295945	5448.785	3.643	.000	.497857	1.658198
N2.05r_mean	.474725	1.622965	1863.409	.293	.770	-2.708295	3.657745
N3.1p1_mean	-.203564	.289714	1752.573	-.703	.482	-.771786	.364658

a. 従属変数: 項目4性役割・アピール被害経験。

-2 対数尤度	3205.047
赤池情報基準 (AIC)	3221.047
Hurvich and Tsai 基準 (AICC)	3221.234
Bozdogan 基準 (CAIC)	3266.311
Schwarz's Bayesian 基準 (BIC)	3258.311

そこで、あらためて説明変数の候補となる意識や定義に関する得点の部局別平均(表3-5、表3-6)を眺めてみるが、被害が多い部局であるから得点が低い、という傾向がはっきりしているわけではない。たとえば性役割・アピールでは、被害の多い病院、医学部では定義得点は低く保守的だが、同じく被害が多い経済学部では定義得点は高くリベラルである⁶。性的接触では、被害の多い病院、看護学部、経済学部、医学部での定義得点にバラツキがあり、医学部や経済学部より定義得点が低く保守的な部局も少なくない。性的言辞では、性役割・アピールと同様、被害の多い病院、医学部では定義得点は低く保守的だが、同じく被害が多い経済学部では定義得点は高くリベラルである。意識を表す項目2についても、はっきりとした傾向を見いだすことは困難である。したがって、この点についての検討は行き詰まったと考えざるを得ない。

表3-5 知識・SH定義得点部局別平均値

	n1-1r (知識)	性役割・アピール被害定義得点	性的接触被害定義得点	性的言辞被害定義得点
医	2.09	8.38	10.83	6.95
薬	2.04	9.77	11.23	7.23
経	2.35	10.50	11.55	7.65
人 社	1.67	10.00	12.00	8.00
芸 工	2.20	8.76	10.64	7.00
看 護	2.15	9.16	10.73	6.97
自 然	2.16	8.84	10.60	6.88
事務局	2.04	8.77	11.30	6.96
病 院	2.00	8.04	10.28	6.60
その他	2.25	9.93	10.89	7.32
不 明	2.08	8.74	10.98	6.82
合 計	2.06	8.49	10.63	6.82
F値	2.252	2.747	3.662	2.307
有意確率	.014	.002	.000	.011

表3-6 SHに関連する意識項目部局別平均値

	項目 2-1	項目 2-2	項目 2-3	項目 2-4	項目 2-5r	項目 2-6	項目 2-7	項目 2-8	項目 2-9	項目 2-10	項目 2-11r	項目 2-12	項目 2-13	項目 2-14r
医	2.56	3.27	2.66	2.94	2.23	2.19	3.34	2.87	2.19	2.50	3.84	1.95	2.98	2.85
薬	2.52	3.30	2.48	3.09	2.48	2.27	3.26	2.83	2.50	2.52	3.78	2.04	3.39	2.61
経	3.05	3.50	3.40	3.25	2.50	2.85	3.70	2.85	2.37	2.63	3.95	1.85	3.21	2.45
人 社	3.67	3.67	3.33	3.00	2.00	2.00	3.67	4.00	3.00	2.67	4.00	2.67	3.67	2.00
芸 工	2.58	3.45	3.05	3.00	2.44	2.21	2.79	2.60	1.90	2.42	3.85	2.16	2.90	3.15
看 護	2.75	3.52	2.97	3.15	2.52	2.50	3.56	2.94	2.21	2.91	3.88	2.45	3.55	2.91
自 然	2.57	3.38	2.92	2.68	2.36	2.16	3.00	3.08	2.04	2.48	3.84	2.08	2.68	2.68
事務局	2.61	3.04	3.00	2.89	2.44	2.82	2.96	2.89	1.89	2.29	3.64	2.07	3.21	2.71
病 院	2.61	3.36	2.92	3.01	2.21	2.37	3.42	2.93	2.09	2.67	3.73	2.00	3.24	2.54
その他	3.15	3.39	3.18	3.15	2.48	2.25	3.67	3.00	2.14	2.85	3.82	1.93	3.00	2.44
不 明	2.65	3.36	3.06	3.02	2.20	2.46	3.18	3.00	2.44	2.64	3.79	1.90	3.21	2.54
合 計	2.64	3.34	2.89	3.00	2.27	2.36	3.35	2.92	2.16	2.61	3.78	2.00	3.16	2.64
F 値	1.627	.892	3.467	.864	1.055	2.919	3.014	.780	1.532	1.749	.982	1.449	3.629	2.870
有意確率	.095	.540	.000	.567	.395	.001	.001	.648	.123	.066	.457	.154	.000	.002

3.4. 厳しいSH定義はホンネかタテマエか

逆に言えば、上記のような、被害の生起とSH定義の厳しさが相即していない事態がいくつかの部局で起こっている、ということになる。これは、冒頭で述べた「厳しいSH定義はホンネかタテマエか」という問題意識とも重なる。これをどう解釈すべきか。

これに対しては、2通りの解釈がありうると思う。第1に、4.で検討したようなSH定義がタテマエであって、実際の行動においてはもっと甘い(=保守的な、男性優位な)判断基準をもちいており、そのためにSHの生起が少なくない、という解釈。第2に、SH定義は必ずしもタテマエとばかりは言えないが、SHの生起するような状況は部局単位よりももう少し小さいセッティ

ング(たとえば「講座」「教室」や、指導教員と院生の一对一の関係など)でおこるため、定義と生起の連動は必ずしも非常に強くはならない⁷、という解釈。

こうまとめてみたが、この2解釈の優劣についてははっきりと判断することは難しい。以下で、若干の考察を試みよう。

もし後者であるならば、周囲の環境に存在するSH定義の厳しさが、あるセッティングではSH行為に対する抑止力になっていない状況がいろいろなところで存在する、ということになる。直感的には、これが多くの大学での現状であるような気もする。すなわち、SH防止に気を配っている教員・研究室がある一方で、そういうことにまったく頓着しない教員・研究室があり、そのうちの一部でSHが発生する、ということである。SHに関する研修は大学内での研修メニューの定番になったが、多くは任意参加であり、全スタッフが出席を義務づけられることは稀であり、本当に聞いてほしい人は研修に出てこない、というのはよく聞く嘆きである。

一方、前者の解釈が当てはまっているという可能性ももちろんある。2でご覧いただいたように、SH定義の3因子のうち2因子までもが右肩上がりの分布をとる、すなわち多くの人が定義について非常に厳しい判断を示す、ということは、SHの生起状況が少なくないことと矛盾する。したがって、SHについて厳しい判断を示しつつ、実際にやっている行動はそれとはちがっているという可能性はある。ただしこのあたりについては、3.3.で論じたように、SHの生起が多い部局の一部で定義判断が甘くなっているようにも見え、現段階でははっきりとしたことを言うことはできない。

4. 結 語

本稿では、大学における教職員向SH調査のデータを用いつつ、SH定義の3因子とその性差、年齢差を規定する要因について分析し、また、部局ごとのSH生起率の差と、それを規定する要因についての分析を試みた。

SH定義の3因子の分布の規定因については、性別、年代以外に、SHに関連する意識が規定することがわかった。部局については、最終的には規定因から外れた。

生起率部局差の規定因については、データの限界によりSH定義と生起率との関連について特定できるモデルが成立せず、十分な結論を得るまでには至らなかった。だが、データの限界の裏側にある「声なき声」の存在について認識する機会が得られたことは、研究上のみならず、防止の観点からも有意義なことであった。

なお、SH定義とSH生起の関連性をめぐって、SH定義の厳しさはホンネかタテマエか、ということについても考察を試みた。今回のデータでは、定義と生起率についてのサブカテゴリーが学部レベルの大きな部局であることもあり、より詳細な所属を勘案しなければ環境因としてのSH定義の影響の大きさを特定することは難しいであろうことが指摘された。

総じて、大学内でのSH調査の限界を示すような分析結果となったことには残念な思いも残るが、それでも多くの方のご協力があってこの分析が可能になった。その点について、この調査にご回答いただいた方に深い感謝の念を表明してこの稿を閉じたいと思う。どうもありがとうございました。

文献（著者名アルファベット順）

- 森田洋司 2010 『いじめとは何か 教室の問題、社会の問題』、中央公論新社。
沼崎一郎 2005 『改訂増補版 キャンパス・セクシュアル・ハラスメント対応ガイド』、嵯峨野書房。
セクシュアル・ハラスメント専門委員会 2002a 『平成14年度実施 名古屋市立大学教職員等を対象とするセクシュアル・ハラスメントに関する調査報告（概要版）』。
セクシュアル・ハラスメント専門委員会 2002b 『平成14年度実施 名古屋市立大学教職員等を対象とするセクシュアル・ハラスメントに関する調査報告（最終報告）』。
養父知美、牟田和恵 1999 『知っていますか？ セクシュアル・ハラスメント一問一答』、解放出版社。

注

1. 名古屋市立大学大学院 人間文化研究科 教授
2. 付属病院を含む。名古屋市立大学ホームページ（http://www.nagoya-cu.ac.jp/gaiyou_teisu.php）による。2009年9月22日最終確認。
3. 付属病院を含む。名古屋市立大学ホームページ（<http://www.nagoya-cu.ac.jp/1213.htm>）による。2012年8月14日最終確認。
4. なお、沼崎（2005）には「性的いじめ」という独自の概念が登場するが、いじめ研究、特にいじめ研究で明らかにされた集団力動に関する知見とは直接関連しないようである。
5. 質問紙では、被害経験については問4と問5の2つの質問を用意し、問4では被害経験の概況、問5では最も苦痛だった被害経験（3件まで）の詳細について聞いている。問4と問5の結果は必ずしも一致していないが、今回は問4に基づいて重症度指標を作成することにした。

今回の調査の問5の回答と問4の回答をクロス集計などでの照合してみると（下表注-1、表注-2参照）、問4で被害を訴えていても問5でその経験（の一部）についての詳細を回答していない、という不一致が多く、逆に、問4で被害を訴えていないのに問5で詳細を回答している回答者は少ない。

ところで理論的には、被害経験についての当事者の報告には、報告の過剰（いわゆる「騒ぎ過ぎ」）と過少（「訴え（られ）ない」）の2方向のバイアスが生じうる。もちろん今回多かった、問5の詳細を回答せずに問4の被害経験を回答した回答者の中にも、両パターンが存在が当然考えられる。

被害者の心情を慮るに、質問紙調査に詳細を回答することへの躊躇は当然あると考えられるし、過去のSH事件等の経験が教えるのは、二次被害に代表されるSHに対する冷淡・酷薄な態度が過少報告を招きやすい状況を作っていることに注意すべき、ということである。また、問4よりも問5のほうが項目数も多く記入に時間がかかるなど、質問紙の構成上、回答しにくい事情もある。

したがって、過剰報告が含まれる可能性を完全には排除できないが、より回答の多かった問4から重症度を判断することにする。

セクシュアル・ハラスメントの構造的要因（石川）

表注-1 項目4経験重症度段階*項目5-1経験数*性別のクロス表

		0	1	2	3	計
男性	被害なし	242	3	0		245
	危 惧	9	0	0		9
	軽 度	22	3	0		25
	中 度	13	4	0		17
	重 度	7	2	1		10
	最 重 度	4	0	0		4
	合 計	297	12	1		310
女性	被害なし	184	17	2	1	204
	危 惧	26	5	0	0	31
	軽 度	31	17	0	0	48
	中 度	29	17	3	0	49
	重 度	37	35	7	2	81
	最 重 度	16	26	7	8	57
	合 計	323	117	19	11	470

表注-2 各部署の重症度段階得点平均と被害経験得点平均（部局不明を除く）

	N	重症度段階（問4）	被害経験得点（問5）
医学部・医学研究科	177	1.09	0.24
薬学部・薬学研究科	21	0.52	0.09
経済学部・経済学研究科	20	0.85	0.30
人文社会学部・人間文化研究科	3	0.00	0.00
芸術工学部・芸術工学研究科	21	0.67	0.09
看護学部	33	0.94	0.18
システム自然科学研究科・自然科学研究教育センター	24	0.42	0.12
本部事務局・学生課	28	0.61	0.04
市立大学病院	366	1.68	0.43
その他	27	0.85	0.43
合計	720	1.29	0.32

6. ただし経済学部のNは病院、医学部に比べてはるかに小さく、外れ値の影響を受けやすいであろうことは念頭に置いておく必要があるかもしれない。
7. これを研究するためには、所属について調査票により詳細に記入してもらう必要が生ずるが、これは調査に対する心理的な抵抗をかなり高め、調査を極めて困難にするとと思われる。